たとえ、世界を滅ぼしても ～第4次聖杯戦争物語～

壱原紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
たとえ、世界を滅ぼしても　～第４次聖杯戦争物語～

【Ｎコード】
Ｎ６０８６Ｚ

【作者名】
壱原紅

【あらすじ】
初恋の女性とその娘達の幸せの為、そして自分とは違う男への憎悪を胸に間桐雁夜はサーヴァントの召喚へ挑んだ。
さりとて、その根底にある祈りはただ一つ
「自分はどうなってもいい、でもあの子《桜》だけはこの地獄から救い上げたい」
そして現れたのは・・・・・・

これは、あまりにも魔術師にはふさわしくなかった「人間らしい」
マスターと、
心を狂わせ贖罪の機会を望み狂い続ける、「哀れな」狂戦士に堕ち
た騎士と、
１つの世界を滅ぼして１つの世界を救った、「愚かな」英雄の物語。

英霊召喚（前書き）

※注意、こちらの小説にはオリジナルサーヴァントが原作に介入するご都合主義成分や、微妙な腐向け要素が見られますので、受け付けないという方は事前に回れ右をしていただければ幸いでございます。

それでも見てやろう！という心優しい方は、どうぞ閲覧してくださいませ。

英霊召喚

「■■■■■■――――――――――！！！！！」

その時の事を、彼は今でも覚えている。

「消えろ、貴様の存在はあまりにも赦しがたい・・・！」

自らと救いたいと願った少女を、あの地獄から助けてくれた2人の騎士を

対になるような、黒き騎士と白き騎士の姿を――――――――――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ、閉じよ。繰り返すつどに五度、ただ満たされる時を破却する。」

暗く冷たい地下のそこで、その詠唱は行われていた。

言葉を紡いでいるのは一人の男、その彼の後ろの方には一人の翁が立っている。

「告げる。汝の身は我が下に、わが命運は汝の剣に。」

「聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。」

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。」

願いが、ある。
どうしても、叶えたい願いがある。
この身をかけてでも、助けたい、少女がいるのだ。

（その為になら、俺は・・・！）

相当の激痛が体に走っているのだろうに、彼は詠唱を止めない。
片目からは血涙が流れ、仮面のように固まった頬の下で虫が騒ぐ。
それでも・・・雁夜は言葉を紡ぎ続ける。

「されど汝はその目を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖をたぐる者。」

（あの子を、桜ちゃんを！）

分かっている、分かっていた。
この言葉を紡いだ時点で、自分の命は『絶対』に助かる事はなくなったのだと。
あの爺が、自分の助けになるような事を助言する等、ある筈がないと。

「汝三大の言霊を纏う七天！」

分かっていても、自分は――――――――

（狂っていても構わない！俺を食い殺しても構わない！だからあの子を！）

桜、自分が好意を寄せていた女性の娘。
まだ幼い少女が、自分がこの呪われた間桐家から逃げ出したばかりに、あの子が犠牲になってしまった。

非力な幼い少女がこの耐え難い現実に抗う為には、その心を殺してしまうしかなかった。
かつて自分に見せてくれた、記憶に残る彼女の姿はもはやない。

もし、自分が桜を助ける事が出来ても、その心が元通りになる事はきっと無いだろう。

犠牲になったものは多く、この少女が背負うにはあまりにも味方がいない。
家族の元に帰せても、再び元の笑顔を取り戻せるとは限らない。

そして、その隣に自分が存在し、守り、慈しみ、共に生きるのはこの体では叶えられない。
どれだけ間桐雁夜が手を尽くしても、このままでは、桜は永遠に救われないのだ。

それでも…俺は…

「抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！」

（桜ちゃんを、助けたいんだ！）

眩い光が暗い地下を照らし出す。
視界が光に包まれるのを見て、雁夜はその場に膝をついた。
魔力を根こそぎ奪われ、それでも必死に自分が呼び出したであろうサーヴァントの姿を求める。

そうして、雁夜は驚きに目を見開いた。

「二人」、いる。
黒いフルプレートを纏った黒い騎士、呼び出そうとした狂戦士（バーサーカー）にふさわしい騎士。
だがもう一人、その隣に立っているのは・・・・

「問おう、貴方が『我ら』を招きしマスターか？」

肩ぐらいまでの白銀の髪、明らかに理性を宿した蒼色の瞳、そして静かに響き渡る澄んだ声。
雁夜より少し背の高い程度の、中性的な顔立ちをした青年がそこに立っていたのであった。

英霊召喚（後書き）

多くの小説家さん達に魅了され、初心者ながらビクビク投稿いたしました！
不定期更新となりますでしょうが、あきれず見守っていただければ嬉しいです。

これから頑張って更新していきます！

脳内会議（前書き）

※注意、こちらの小説にはオリジナルサーヴァントが原作に介入するご都合主義成分や、微妙な腐向け要素が見られますので、受け付けないという方は事前に回れ右をしていただければ幸いでございます。

それでも見てやろう！という心優しい方は、どうぞ閲覧してくださいませ。

脳内会議

「――――■■■■」

聞き取れない声、湧き上がる黒い魔力、はっきりと直視出来ない歪みを漂わす黒き騎士がいた。
兜を被って見えないその瞳、けれど確かに狂える意思を感じざるをえない、赤い光が見えた。

「問おう、貴方が『我ら』を招きしマスターか？」

そうしてそれに続くように、静かな声が響き渡る、
その声は余りにも静かで、そしてそれを紡いだ白銀の剣士の表情は逆に・・・とても、穏やかだった。

なのに何故だろうか、その穏やかさが逆に、とても――――――――

「どうしたのです？何故返事をしてくれないのですか？」

思わず、息をのんで彼らを見つめていると、不思議そうな声が響いた。
困ったような表情に、雁夜は魔力切れでうまく動かない体を動かし、銀色の騎士に答える。

「ああ・・・そうだ、俺がお前達のマスターだ・・・っ！げほっ！ごほっ！」

何とか声を出して、そして同時に咳き込んでしまう。
まともに立っていることも出来ず、雁夜は思わずその場に倒れこんでしまった。

やはり、なんのイレギュラーか知らないが、
二体のサーヴァントを呼んでしまった為か、体にかかる負担は予想以上に大きかったようだ。

（くそっ・・・サーヴァントや爺の目の前でこんな醜態を晒してしまうなんて・・・しかも、一方は狂化してないとかどうなってるんだ！？）

だがこうして召喚出来た以上、彼らは自分のサーヴァント。
それに、しっかりと話が出来るのなら、もしかしたら桜を助けるのに一番の障害となるであろう
間桐臓硯を倒すのを手伝ってくれるかもしれない。

何とかそこまで考えて、起き上がろうとした、その時――――――

『・・・どういうことです、マスター・・・その身に何を飼っている？いや、寄生されているのか・・・その理由、説明して頂けますか？』

――――――――頭の中に、直接語りかける声が響いた。

「な・・・」

唖然としてしまう、今、目の前のサーヴァントは何と言ったのか？

「大丈夫ですか？マスター・・・貴方は我らを呼び出したのです、余り無理はなさらず。」

『ダメですよマスター、下手に声に出してはそこの蟲翁に気付かれてしまいます。出来ればこのパスでの会話は長引かせる訳にはいかないのです。』

穏やかな笑顔のまま静かに白銀の騎士が俺に触れ、そのまま抱き起してくれる。

だがそれ以上に頭の中に響く声が、それを告げていた。

「どうやら、貴方はこの召喚で魔力の消費が激しいようですね・・・休む部屋はございますか？お連れいたしますのでどうか我らに指示

を。」
『あの蟲翁は明らかにまともでは無い、それに貴方からのパスは虫(アレ)に対しての嫌悪感を告げている・・・虫(アレ)は貴方の敵ですね？そうならば頷いてください。』

コイツは、このサーヴァントは気付いているというのか。
あの爺が人間でもなければ、まともな魔術師ですらない化け物だという事に・・・！
呆然としてしまいそうになりながらも、思わず頷いていた。
敵かと問う声に、それは事実だと告げる為に。

「そうですか、ならばお連れいたします。」
「待て。」

だが、穏やかな笑みを深めてそのサーヴァントが頷いたと同時に、背後からしわがれた声がした。

「・・・なんだよ、爺・・・召喚は無事すんだ、部屋に戻ってもいいだろう・・・」
（っ、今の今まで黙っていたにも関わらず、何故今話しかけてくるんだ・・・っ！）
ギリッ、と歯を喰いしばり精一杯睨みつけるが、声をかけた臓硯は

楽しそうに言葉を続けてくる。
お前の苦しむ顔こそが、楽しくて嬉しくて堪らないのだと言わんばかりに。

「何、よもや貴様が英霊を二体も召喚する等思っておらんかったからのう・・・久しぶりに、表に出てみたくなったわけじゃよ。」
「なっ・・・まさか！？」

そのまま続けて言われた言葉に愕然とする。
そんなと考えたくない可能性に絶望してしまいそうになる。

「察しが良いようで助かるわ、儂にそちらのサーヴァントを寄越せ雁夜・・・分かっておろう、貴様の魔力では二体のサーヴァントを維持する事は、不可能だと。」
「っ、それ・・・は・・・」

答えられるわけがない、事実その通りだからだ。
呼び出しただけで生きているのが奇跡に近い、実際今もこの銀の騎士に支えられている自分が二人分の魔力供給に耐えられる筈がないのだ。

「ふん、ならばさっさと儂にその貴様を支えている方のサーヴァントを渡すがいい、貴様は元よりバーサーカーのマスターになるつもりだったのであろうが・・・イレギュラーになるであろうサーヴァントを貴様が従える事は出来るまい。」

「っ・・・！」

（どうすればいい、どうすれば・・・！）

臓硯は理性のあるこのサーヴァントを自分から引き離す事で、万が一にでも己に反抗する可能性を潰そうとしているのだ。
そんな事を認めれば、恐らく先程感じた一寸の希望すらも確実に消えてしまうだろう。
だが、今此処でそれを拒絶すれば体の中の蟲がこの身を食らいつくすかもしれない。

（今すぐにでも、桜ちゃんを助けられるかもしれないのに・・・！）

悔しくて堪らなかった、こんな時にこのまま要求を呑むしかないと理解してしまうのが。
そうしなければならないのだと、嫌でも感じてしまうのが。

どうして自分はこんなにも――――――――

だがどうしようもない、この味方になってくれそうだったサーヴァントを裏切ってしまうしかないのだと雁夜はそう判断しようとした・・・が

「マスターすいません、ちょっと眠っていてください・・・今から、そこの人外をぶち殺しますので。」
「えっ？」

頭上から降ってきた穏やかな声に意識が止まる。
同時に首に軽い衝撃を感じて、雁夜はそのまま倒れ伏す。

だが、何故かその時、自分の右手の指に何かが填められたような・・・そんな感覚を最後に雁夜の意識は完全に闇へ沈んでいったのだった。

脳内会議（後書き）

突然の謎のサーヴァントのパスを通しての会話、戸惑い困る雁夜おじさん、空気になりかけているバーサーカー、ＫＹな蟲翁・・・色々と突っ込みどころ満載の話です・・・っ！駄文、申し訳ございませんでしたｍ（＿＿）ｍ

次回「悪鬼討伐」、頑張って更新します！

気が向いたら見ていただけると嬉しいです・・・！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6086z/

たとえ、世界を滅ぼしても ～第4次聖杯戦争物語～

2011年12月20日19時49分発行